タンザニアの教会形成と文化変容

— ルーテル教会を中心として —

上 村 敏 文

Church Formation and Cultural Transformation in Tanzania : A Case Study of the Lutheran Church in Tanzania

Toshifumi Uemura

This is a study regarding church formation and cultural transformation in Tanzania. Before independence from Britain, there were seven Lutheran churches in Tanzania which formed the Evangelical Lutheran Church of Tanzania (ELCT). Most churches have been actively involved in politics, not only through education, but also through medical efforts; governmental structure; and all aspects of the political world aiming their involvement toward the realization of an ideal society. Further, with regard to cultural transformation, Tanzania has walked in a different direction than China. In China, the Cultural Revolution denied not only westernization, but also traditional ways of life, such as Confucianism. However, Tanzania church transformation was a return to and acceptance of African tradition. In this paper, I will examine the change in the church from the colonial period until the present, while seeking to ask why the Tanzanian Lutheran Church continues to grow in the present.

はじめに

本論文においては、東アフリカに位置するタンザニアにおける教会、特にルーテル教会を中心とする教会形成と国家の関係について歴史的に概観する。また、世界の中で最も成長しているといわれるタンザニアの教会形成を通して、その社会、文化構造の変容について若干の考察を試みる。

紛争の多いアフリカの中で、タンザニアは唯一、内戦、紛争という「争い」から一線を画している国としてアフリカ研究者の中では知られている。一九九〇年代前半のルワンダ、ブルンジの内戦の際、百万人を超える難民が短期間にタンザニアに流入した際に、大きな部族抗争、紛争も生ずる事なく、また一人の餓死者も出さなかったとの報告が、今西錦司率いるタンザニア調査隊の初期から参加している富田浩造氏によってなされている。⁽¹⁾ それだけではなく、ウンガラ州、キボンド州へ移住してきた難民に対して、近隣農家はその全員を受け入れ、同時に政府は土地を難民家族単位で三・五ヘクタールを供与したとの報告もある。⁽²⁾ また、南アフリカのアパルトヘイト政策に対して、率先して政治犯、難民を受け入れており、その跡地は現在、モロゴロ郊外にある広大なソコイネ大学となっている。首都ダルエスサラームは当時の反アパルトヘイト拠点ともなっていた。マンデラ元大統領が、長年の投獄生活を終え、最初の演説をタンザニアで発した事は周知の事であろう。湾岸戦争以降、キリスト教とイスラム教との対立がアフリカ各地で深まる中、アメリカによるイラク攻撃が開始されるまでは、比較的両者の関係が良好であり、他の地域で紛争の激化により研究基盤を失った研究者達が「研究難民」としてタンザニアに集まり始めている事も注目してもよいであろう。⁽³⁾

一九六〇年代にすでに東アフリカのフィールドワークに着手していた富川盛道氏によれば、一般論としてはあるが、その共存関係について「アフリカの国家は、そもそも社会的には、多様な諸部族による構成を前提に成立している、現代国家の一類型である。ひとは、よく、アフリカにおける部族の対立をいう。しかし、その反面、かなりの程度にうまく、お互いの存在を認め合ったうえで、多くの部族が、同一の国家を形成している事実、目を向けることも必要であろう」と述べている。この点、インド社会を典型とするカースト社会と根本から異なる社会構造を持っているといえる。すなわち、部族をユニットとして、一つのまとまりを持ちつつ、他の部族との間と共存・対立関係を持つて来た。そして、この均衡を大きく崩したのが、ヨーロッパ人のアフリカ侵略であった。

十六世紀初頭、大航海時代にポルトガルを初めとする欧米人がインド洋側にも到達し、カウンタリーフォーメーションとしてカトリックが、まずその地盤をサブサハラの海岸沿いを中心として構築し始めた。しかし、内陸部は風土病や、険しい自然に阻まれており、十九世紀中頃になって初めて「暗黒大陸」としてのアフリカの内部にまで到達しその様子をヨーロッパに報告したのがリヴィングストンであった。当初は宣教師として、後には探検家として現在はタンザニアを囲んでいるタンガニーカ湖、ヴィクトリア湖周辺を調査し、最終的にはナイル川の水源探索を行なった。リヴィングストンが一時音信不通になり、スタンレーとの歴史的邂逅を果たした後、亡くなり運ばれたバガモヨ。奴隷貿易の拠点となったインド洋上に浮かぶザンジバル。これらの地域は、ヨーロッパ人のアフリカ進出の出発点であり、また未知の世界であったアフリカ内部の世界へと地理的に大きな役割を演じた。十九世紀後半に入り、ドイツ、イギリス、アメリカのプロテスタント諸派が本格的に布教を開始する。そして、二つの世界大戦を経験した後、「アフリカの年」といわれる一九六〇年代にタンザニアはザンジバルと合同する形で独立を果たす中、キリスト教はアフリカの伝統的宗教と対峙し、当初は欧米式キリスト教をそのまま植え付けるというスタイル

で、また一九七〇年代からは、モラトリウムという新しい動きにより、外国人宣教師と一線を画して行くという方向性から、アフリカ独立教会の構築の動きという流れにあつて、タンザニアはこの潮流とは大きく異なった動きをしている。特にアメリカ、北欧諸国とは国家レベルというよりは、個々のルーテル教会との関係を緊密に保つて来た。そして少なくとも一九九〇年代までは、キリスト教、イスラム教、そしてアフリカ伝統的宗教が均衡し、比較的良好な関係を築いていた。

本稿においては、まずタンザニアの歴史的背景について概観した上で、キリスト教が国家形成にどのような役割を果たし、今日まで来たのかを、特に教育、言語という点に着目しつつ論じて行く。その上で、人口が三〇〇〇万半ばの国において、ルーテル教会の信徒数が現在三〇〇万人を超えて何故現在もお成長を続けているのかを分析し、日本において宣教の参考となる点がないかを考察して行く。

一 歴史的背景

タンザニアは、世界の中でもキリスト教、特にルーテル教会が最も伸びている国として知られている。十九世紀、リヴィングストンを初めとして、J・H・スペック、R・F・バートン、J・トムソン等の東アフリカ探検を通して、次第にアフリカは「未開」の大陸としてヨーロッパ列強に関心を持たれるようになった。タンザニア国立博物館の調査によると、最初のドイツ人がザンジバールに到達したのは一八八四年一月七日という記録が残っている。このドイツ人は、クラッフ博士 (Dr. Krafft) であると思われるが、彼の目的は当時アラビアの支配下にあつた東アフリカを「神のもとに」イスラム教からキリスト教へと改宗させる事であつた。これは、当時の西洋人の宗教観を

強く反映しており、「キリストのみ」という「信仰」のもとに、また文化進化論の立場からも、西洋社会が最も発達した文化形態として、アジア、アフリカ等の「未開」の大陸、すなわちキリスト教を知らない地域に、福音を述べ伝えて行かなければならないという「使命感」が背景にある。リヴィングストンにしても、当初は探検家としてよりも宣教師としての立場にいた。クラッフ博士が、東アフリカ地域に到達する前の、一八五八年九月に既にアルブレヒト・ロスヒャー (Albrecht Roscher) が、ピッキオリ (Piccoli) 号に乗船してザンジバールに到着し、大陸内部の探検の準備を進めていた。そしてリヴィングストンの二か月後にすでに大陸のニヤサ湖 (Lake Nyasa) に到達している。また、諸外国、特にドイツ宣教師団体との関係においては、一八二四年に設立されたベルリン宣教師協会が最も古い記録として残っているが、その後も一八三六、一八八六年とドイツ東アフリカ福音宣教師協会を形成し、宣教師活動が積極的に展開されていった。一九〇八年一月二日には帝国宣言として「国家プロジェクト」としての植民地化が、宣教と相俟って推進されていくことになる。⁽⁶⁾ 宣教師に続いて、商人、そして軍隊が入り、一八八一年には最初の武力衝突が報告されている。⁽⁷⁾ その後、ドイツ東アフリカ会社の設立(一八八五)を通して植民地化が本格化して行く。布教と植民地支配は時には反目しつつも、密接に関わりながら進められて行くのである。「一人のヨーロッパ人に五十平方メートルの土地を与えよ。そうすれば、短期間に彼は、その土地の王となり、法を与え、支配者となるであろう」という文章は、当時の支配者の感性を代表しているであろう。一八八五年、ブレーメン会議の委員は、宣教とリンクさせて植民地支配はマスト(ねばならない)であると断じていた。

第一次世界大戦前後からアフリカ諸国が列強の植民地分割競争の対象とされ、第二次世界大戦以降、一九六四年の独立へと向かうわけであるが、タンザニアのルーテル教会はといえば、独立の前年の一九六三年六月一九日に七つのルーテル教会が合同して、タンザニア福音ルーテル教会 (ELCT) を形成する。今日、ELCTは二〇のダ

イオシス（教区）を持ち、一九九八年現在二三万五七三一人の信徒、一五二九人の牧師がおり、その教勢は更に伸び続けている。その中心的役割をなしたのが、ミツシヨンスクールの存在である。初代大統領ニエレレがカトリックの信徒であった事もあり、国家形成と教会、教育が不可分に関わって行く事になる。

プロテスタント教会の場合、組織的に布教活動がなされるというよりは、宣教師が現地とのつながりの中でどこに向かい、そしてその土地に対して教会を建てただけではなく、いかなる働きをしてきたかが決定的要因となっている。アフリカ伝道に最も長い歴史を持つローマ・カトリックが最大勢力であることは間違いないが、タンザニアの場合はドイツ、イギリスによる植民地支配の関連から、ルーテル教会と聖公会は、カトリックに続く第二グループとなっている。

聖公会の場合は、一九七四、七五年のエドモンド・ジョンによるいわゆる「治癒伝道」⁽¹²⁾は村落部において熱狂的に受け入れられた。この「治癒伝道」が成功したか、失敗したかは評価の分かれる所であろう。多くの信徒を獲得した点においては成功といえるかもしれないし、現在でも続いているアフリカ独立教会と欧米型キリスト教会との対立構造の複雑化という点において、またエドモンド氏の活動が、氏の病死により、実質的には二年という文字通り短命に終り、その後の「治癒伝道」は長続きしなかったという点では必ずしも成功とは言えないのかもしれない。しかし、アフリカ型の宣教スタイルとして、賛否両論ではあるが一つの方向性を示した事には間違いないところである。

ルーテル教会においては、一般的にはこのような呪術行為、伝統的宗教からは乖離していく傾向が現在の所は観察できる。その一つの要因としては、タンザニアに渡った宣教師が悪魔祓いをするという「能力」と、またその意志がなかった事も一つの要因として挙げられよう。力点を置いたのは、むしろ教育と医療活動であった。特にマサ

イ族の間においては、圧倒的男性社会であつて女子教育を積極的に進めた。⁽¹⁴⁾一例としてマサイ女子ルーテル中等学校 (Maase Girl's Lutheran Secondary School) が挙げられる。この女子校は、アメリカのセントポールからの宣教師、デーヴィッド・シムンソン氏⁽¹⁵⁾によつて建てられた。コーヒー栽培でも有名なキリマンジャロ近郊の丘陵地帯に全寮制の学校として今日も続いている。

タンザニアのルーテル教会は、ドイツ、デンマークそしてスウェーデンを中心とした北欧の宣教師によつて根を下ろしたが、第一次世界大戦におけるドイツ敗戦による宣教師の引き揚げにより取り残され、「孤児」の状態となつた。これを引き継いだのがアメリカであつた。一九二二年にラルフ・ハント氏がアウグスターナ・シノッドから派遣されたのが最初と考えられる。アメリカのルーテル教会の宣教は、組織立つたものというよりは、個人や各個教会に支えられた宣教師の働きによるものが多い。その代表的な人物の一人がラルフ・ハント氏の影響を受けたデーヴィッド・シムンソン氏であつた。

今や、シムンソン氏の働きは伝説的なものとなりつつあるが、長年欧米化を拒否して独自の生活様式を変えようとしなかつたマサイ族への伝道に当たつては、一つには人食いライオンとの格闘⁽¹⁶⁾、一つにはマサイにとつて精神的な支柱でもある呪術師オレ・ントコテ氏との出会いがある。⁽¹⁷⁾この二つの事が重なり、マサイ族の多くはルーテル教会の会員となつた。

ここで、一つの大きな課題と直面する事になる。アフリカのキリスト教の受容における大きな課題は、一夫多妻制に関する見解である。今日も女子割礼を含むアフリカに顕著に見られる風習、伝統に対して多くのキリスト教諸派の宣教師が、厳しい態度で認めないという立場を取つて来たのに對して、タンザニアに渡つたルーテル教会の宣教師は容認するという立場を取つた。一九五〇年代は、まだ欧米主導の時期であるが、すでにリベリアの福音ル

テル教会は、長期にわたる一夫多妻の者を教会に迎え入れている。マサイ族の伝統においては、今日でも一夫多妻制であるから、実際的にはキリスト教のこの一夫一婦制の新しい「文化」に対して抵抗は少なくはなかったと考えられるので、このルーテル教会の一夫多妻の容認は、キリスト教受容の上で大きな要因となった事は間違いないところであろう。

しかし、興味深い事ではあるが、この一夫多妻制に関して、今日のタンザニア人によるルーテル教会は認めないという立場を取っている。一夫多妻の会員は、聖餐式に参加する事は赦されないという以上に破門され、共同体の枠からはみ出してしまふ⁽¹⁹⁾。同様に、飲酒に関しても厳しく、洗礼を受けたものは、酒類を飲む事ははや赦されない。飲酒の場合も同様に破門される事になるようだ。

二 教会と国家形成

一九七二年七月二日のタンザニアデイリー新聞によると「タンザニアの教会は今や、新しい社会の構築という新しい課題と新しい機会に直面している」⁽¹⁹⁾と、記している。また、その二か月後の九月一日には「教会は効果的にタンザニアの社会主義に関わって行かなければならない」⁽²⁰⁾としている。これらの論調は、一九七二年七月一日にムソマ(Musoma)で開催された宗教者会議の教育とウジャマ(Ujamaa)⁽²¹⁾に関するテーマに関するTANUの⁽²²⁾声明を受けての記事と思われる。文部省のチワンガ(Chiwanga)大臣自身も聖職者であり、タンザニアキリスト教協議会の会合で、教会がウジャマの生産活動の原動力となり、共に働き、開発の基盤とならねばならないと述べている。また、初代大統領であるニエレレ(Nyerere)はクリスチャンセンチュリーのインタビューに答えて「私は」社会主

義者の立場として話をしているが、アフリカの教会が、無神論主義として規定されてはならない。それゆえに社会主義に反対し、あるいはアフリカにおける社会主義の進展を阻み、キリストから離れる事を危惧する。もしそのような事態になればアフリカのキリスト教の将来は見えなくなってしまうであろう」⁽²³⁾

ニエレレ大統領の政治と宗教の関係については、必ずしも一定であるとは言えないが、これはおそらくイスラム教に配慮しての事であろうと考えられる。一九八五年の大統領としては最後のスピーチの中で、彼は宗教間の対立を警告し、民族紛争よりも大きな危険要素と見なしていた。⁽²⁴⁾

ザンジバールとの合同以前の一九五九年七月に、タンガニーカ教会委員会が作成したQ & Aによると「キリスト教は政治に参加していく責任があるか」という問いに対して、明確に「イエス」としている。また「教会は政治的自治に対して積極的に支持すべきである」と明記している。一方、「国家も社会形成において神により頼み、その働きを助け、宗教を促進する事に義務を負う」としている。なぜなら「神は愛であり、隣人を愛せと教えられている。隣人を愛するという事はその福利を可能な限りに促進させることにほかならない。その途上において教会はすべての人々に対して援助する事は当然の事であるからである。それ故にタンガニーカ教会委員会はキリストチャンがますますこの国の政治に積極的に関わりキリストチャンの判断が政治の諸事項に影響を与え、キリストチャンの良心が政治の諸問題に反映され、公的生活においてキリストチャンにおける統合の良い模範を示す」としている。⁽²⁵⁾建国当初においては、特にイスラム教に配慮はしつつも、キリスト教がイニシアティブを取っている。いたるところにおいて宗教の自由と平等を、最大の注意事項として提示している事は注目される所である。ニエレレ大統領の次の大統領アリ・ハッサン・ムウイニイ (Ali Hassan Mwinyi) はイスラム教徒であるが「世界の偉大な宗教は、神のもとに人は平等であるという原理によってなりたっている」⁽²⁶⁾と言明している。また、その理想社会を具体的に実現する方法と

して強調されたのが、言語・教育政策であつた。

三 言語・教育政策と文化変容

ドイツ植民地時代、また国際連盟の信託統治時代を通して、教育はすべて宣教師によって提供されるのであるが、ニエレレ大統領は一九六三年の段階で、宣教師の主要関心事はキリスト教信仰を広める事に他ならないが、これを強要、改宗を促進する事に関しては否定的である事がその演説から読み取る事ができる。⁽²⁷⁾すなわち、キリスト教徒とイスラム教徒との不均衡を懸念しているのである。その解決策として、イスラム教徒を学校に入学させる優先権を与える事としている。この目的のために、ミッション系の学校を世俗化の方向へと政策転換する事をも提案している。当時、問題となっていたのは、両者の間の教育レベルの格差であり、その結果としてキリスト教徒が政府関係諸機関の主要ポストを独占するという不均衡が発生し、イスラム教徒からの不満が根強くあつた。

文化変容のテーマを考えていく上で、念頭に置いておかねばならないのは、アフリカにおける変容は、例えば中国におけるそれとは全く異なるベクトルを有しているという事である。オックスフォード大学で歴史、ローマ大学で神学を学び英国国教会主教であつたアフリカのキリスト教研究の先駆者エイドリアン・ヘイスティングズ氏の言葉を借りるならば、

「中国の用語では、『文化革命』は、伝統、儒教、歴史的過去の重荷を一掃することを意味した。アフリカの用語では、『文化革命』は今日、正反対のことを意味しているかもしれない。それは、先祖たちの知恵の再発見、

その儀式の再評価、その名前の再興、その言語の再生を意味している」。⁽²⁸⁾

タンザニアにおいては、ドイツ植民地下の礼拝では、踊り、歌、儀礼等アフリカの伝統的風習は禁止されていく。現在では全く考えにくいが、植民地化されていく東アフリカの教会においては、このような西洋文化に較べて「劣った」伝統は完全に否定されていったのである。厳しい統制のもとに教会の規律違反者は破門、あるいは教会、共同体から追放処分を受ける事になる。植民地時代、アフリカ人をいかに良く働かせ、「文明化」（西洋化）させていくかは大きな課題であった。「アフリカの光明」として知られているシュバイツァー博士でさえも一部同じスタンスを取ったために、現在アフリカにおいてその功績が讃えられるどころか、逆に「植民地支配の先兵」というマイナスの評価も与えられている。⁽²⁹⁾

ニエレレ大統領は、独立を果たしてからは前項で概観したようにウジャマといわれる社会主義の方法論を導入した。その最大の政策の一つは、民族の大シャッフルであった。アフリカの他の国家と比較しても決して少なくはない一二〇あるといわれる部族（ケニア約八〇、ザンビア約七〇、ウガンダ約六〇）を移動させての部族間融合、そしてその結果として部族間のインターマリッジが進んだ。部族数そのものはタンザニアより少ない隣国のケニアや、他のアフリカ地域で見られるような有力な部族間の抗争は、ほとんど見る事ができない。

加えて、それぞれの部族言語を持っているにも拘わらず、バンツー語とアラビア語の「混血」としてのスワヒリを共通言語とし、初等教育はスワヒリで行われているために、全部族からタンザニアは一つの国家として認知されるに至ったといつて良いであろう。これは、アフリカの中にあつては非常に希有な出来事であつた。例えばガーナの独立時にはエンクルマ初代大統領は少なくとも八人の部族語通訳官が必要であつたと言われるが、タンザニアに

おいては「通訳」の必要はなく、スワヒリ語での演説により全部族が理解する事ができた。聖書も当初からスワヒリ語により翻訳され、全国民が親しむ事ができる事もその一つの表れである。この事はサブアフリカの国々においては唯一の「現象」として国家形成がなされた例として知られている。²⁹⁾

タンザニアの教会形成が他の国々と異なっているもう一つの側面は、宗主国であったドイツが二つの世界大戦に敗北する事によって、活発に働いていた宣教師がいなくなり、「孤児」として放置された事にも起因しているのではなからうか。さまざまな領域において中心的な役割を有していた宣教師が、突如不在となる事で、残された現地の人々は必然的に指導力を発揮せざるをえない状況におかれたのである。その結果、特に教会の自治という点に関しては、他のアフリカの国々と大きく異なった点ではなからうか。この傾向、精神は第二次世界大戦後の一九五〇年、宣教師団が復帰した時にも引き継がれる事になる。例えば北部タンザニアに拠点を持っていたライプチツヒ宣教師協会は、その後支援をする事を拒否されている。³⁰⁾ 経済的支援においても、バハヤルテル教会では、一九五〇年以降、すべての外国の援助は牧師給の目的として使われる事はなかった。³¹⁾ 第二次世界大戦以後は、タンザニアにおいて戦争に直接関わらなかった国々、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、フィンランド、そしてアメリカが、ドイツの後を引き継いで「養母」としての役割を果たしてゆく事になる。前述したバハヤルテル教会はスウェーデン、イラクルテル教会はノルウェー、ウベナーコンデルテル教会はデンマークとフィンランド。アメリカは特に北部の教会と関わりを持つ事になる。

教会の自治、自養、自伝は中国のいわゆる三自愛国運動の標語であるが、現在の所、まだ確証はないが、タンザニアにおいてもこの三つの精神が行き渡っているのは中国の影響があるのではないかと推論している。実際のところ、タンザニアのウジャマ政策は中国を社会主義のモデルとしたと言われている。常識的に三自愛国運動が紹介さ

れた事は考えられなくはない。中国との相違は、共産党国家形成の中において、欧米諸国の影響をできるだけ払拭しようとしたのに対して、タンザニアは初期においては北欧諸国と、そして近年はアメリカとの関係を切らなかつた事にある。むしろ、ELCTが未開拓であつた地域に宣教師達が入つて、ヘルセンター、幼稚園、小学校、中学・高等学校、大学等のミッションスクール建設を容認した。教会活動以外の社会的事業には、海外のLCS (Lutheran Coordination Service) との関わりを積極的に持ち、特に教育、医療の方面で、教会のみならず、国家形成にも大きな役割を果たした。

今後の課題

素朴な疑問として、ドイツ、イギリスの植民地支配を受け、「強制された」宗教としてのキリスト教が、独立を果たした今日、何故受け入れられ、しかも急速に成長しているのか。この疑問を解いていくためには、ドイツ、イギリスの植民地支配から独立を果し、国家形成をしていく中で、いかなる働きをキリスト教、特にルーテル教会が果たして来たかの歴史を概観する必要がある。

大きな転換期は一九六〇年代中頃から一九七五年ナイロビでの世界教会協議会開催までに顕著に見る事ができる。「ミッション」の時代から「独立」へと変化してゆく一つのターニングポイントであつた。ジョン・ムピティ氏²⁴は一九七〇年の論文で「アフリカの教会はキリスト教と伝統的宗教との関係を注意深く見るべき時が来た」と冒頭に高らかに宣言している。

アフリカにおけるキリスト教伝道においては、エドモンド氏が試みた悪魔祓い、そして女子割礼、一夫多妻制等

を代表とするアフリカの伝統（宗教）と、新しい価値観としての欧米諸国からもたらされたキリスト教が大きな神学的対立点になる。「アフリカの」キリスト教、すなわちアフリカの伝統に回帰し重視していこうとする方向性と、まったくその反対にこのような非近代的呪術行為を排除していこうとする二つの大きな流れがある。

ヘースティング氏によれば「一九二〇年代までに（そして実際、多くの場所ではそれ以前の長年にわたって）白人支配とアフリカ人の主導権との間に大きな緊張関係が生じていた」³⁵。この緊張関係は現在も続いており、アフリカのキリスト教を考える上では今後も注視していかなくてはならない。現在ではこの緊張関係が、欧米の宣教師対現地のアフリカ人という対立構造というよりはむしろ、アフリカ人同士の間において「アフリカ独立教会」を形成していく中で、それぞれの教派内で議論されてきている事に注目しなくてはならない。タンザニアのルーテル教会の場合は、ドイツ、北欧諸国の伝統を背景としつつ、また第一次大戦以降はアメリカの影響下、外見上において少なくとも牧師の服装、礼拝様式においてその影響は強く見る事ができる。しかし、例えば堅信式は通過儀礼としての成人儀礼と見事なまでに融合し、男子はスーツ、女子の場合は白いウェディングドレスを来て、村を挙げての大イベントとなっている事、洗礼を受けると共に禁酒を励行する事、礼拝にドラム、踊り、手拍子を採用している事、男女の席を左右に分けている事、特異な例としてはエヴァンジェリストの存在が挙げられる。そしてこのエヴァンジェリストの農村伝道が、ルーテル教会の躍進の大きな原動力となっている。神学教育の場のみではなく、いわゆる青年団から生え抜きが選ばれており、この中から牧師が出ている。大学に行ける人間あるいは留学をする者はこの中から選ばれる。

また、興味深い事に、ヘースティングズ氏がすでに指摘していた事ではあるが、「スーパーインテンデント」とか「プレジデント」という肩書を「ビショップ」という肩書にきりかえようとする強い傾向があること」³⁶は、今

日では「傾向」ではなく「事実」として、ルーテル教会においてもダイオシスが形成され、ビショップが厳然と存在している。⁽³⁷⁾最初のビショップとしてルーテル教会の枠を超えて全アフリカで活躍したステファノ・R・モシ（一九〇六一一九七六）、ジョシア・キビラ（一九二五—一九八八）両氏のリーダーシップは注目される。

タンザニアにおける教会形成、特にルーテル教会の場合、教育、医療等の積極的関わりと、牧師以外の青年団を中核とするエヴァンジェリスト達による農村伝道の成功は、特に独立以降の急成長の要因となっている。現在も右肩上がりの成長が続いているのであるが、いくつかの課題は残されている。

ヘイスティングズ氏が述べているように「アフリカ人の神学者は、自分がそれと格闘しなければならない主要な、非聖書的現実が自分自身の民族の非キリスト教的宗教伝統である、とわかっており、現段階のアフリカの神学は、アフリカ人のキリスト教学者とアフリカの永続的な宗教および霊的存在との間の、ちょっとした対話のようなものとして形成されつつある」としているが、欧米で培われて来た伝統的神学と、深層部において今後「アフリカ神学」の対立が生じつつある。アフリカにおける神理解の継続性と真正性のテーマは注視していく必要があると同時に、大変興味のあるテーマでもある。

欧米化を拒否してきたキリマンジャロ地域に住んでいるマサイ族が、人食いライオンと格闘した伝説的アメリカ人宣教師（E.L.C.A）であるシムソン夫妻の働きにより、またマサイ族の中で最も大きな影響力を持っていたメディスンマンのオレ・ントコテ氏のパウロのダマスコにおける回心を想起させるセレンゲティ平原における「奇跡」により、数千人の単位での洗礼が実現した。⁽⁴⁰⁾この「事件」は、タンザニアのみならず、マサイに一目を置いているアフリカ人の中でも非常に大きな出来事であった。しかし、この結果として伝統的な社会構造は大きく変容するさざしがいくつも見られる。その一つが女性の社会進出である。圧倒的男性優位社会の中で、高等教育を受ける

女性が増えつつある事は、アフリカの文化変容を語る上で最もホットなテーマとなる多重婚の是非の論議へとつながって行く。また、マサイにおける女性の役割が、変化しつつある事によりマサイ全体を支えて来た伝統的秩序が崩壊し、牧畜を中心としていた社会から、欧米型の社会の憧憬と希求により、今後大きな変化をもたらすことが予想される。

タンザニアのルーテル教会の場合、他のアフリカ諸国と異なり、現在の時点においては、文化変容は否定というよりもむしろ是認され、欧米型の社会に近づく事がむしろ望まれているようにも見える。二つの世界大戦という外的要因によりタンザニアにおいては、教会内の形式的文化変容は比較的スムーズに進行し、伝統音楽、踊り、ドラマによる讃美、そして統一言語としてのスワヒリ語による礼拝が比較的早い段階から行われている。しかし、内的な文化変容、すなわち、現在の所否定されてきた魔術、祖先崇拜、夢・幻の解釈、あるいは親子・夫婦関係の構造的、機能的な変化においてみられる「非継続性」は、今後他のアフリカ諸国同様に、「継続性」とアフリカのアイデンティティの再認識の課題と相俟って大きな関心を持つて改めて注目され、どのような方向性に向かって行くのかは、日本における今後の宣教というテーマとも関連させつつ研究をしてゆく必要がある。

付記

二〇〇四年十二月に実施したフィールドワークの際、同行したルーテル学院大学の卒業生、並びに東京国立博物館のエディター（当時）が、タンザニアのイリングガにあるイルツラルーテル教会で洗礼を受けた。タンザニアに到着してわずか五日目の出来事であった。ダルエスサラームのルターハウスに宿泊をして、ジープを貸し切り、一〇〇〇キロ以上を走ら

せ、主としてタンザニアの南西部の高原地帯のルーテル教会を回った。アメリカのセントポールのルーテル教会から派遣された宣教師が設立したツマイニ大学の学生がすべての行程に同行してくれた。一日が祈りに始まり、祈りに終る。大学の図書館にもほとんど蔵書はなく、神学書も皆無に近い。しかし、聖書一冊を日々丹念に読み込んでいる。そして祈る。これは、大学生だけではなく、幼児から老婆にいたるまで同様である。教会がすべての生活の中心にあり、農作業の合間に、スワヒリ語の讃美歌を歌っている。また、平日であっても教会の中だけではなく、学校、家で常に聖書に親しんでいる。アフリカの成人儀礼が堅信式と結びつき、一〇歳から一二歳までの子ども達が、聖句を暗んじている。口頭伝承、またほとんど書物がない状況にあつて聖書を覚えるのは彼らにとつては日常的な事であり、喜びでもある。讃美歌も欧米のメロディーとは異なり、伝統的な和声で見事なハーモニーを醸し出す。楽器はといえば太鼓と拍手。以前は、宣教師により教会の中での太鼓、拍手は禁じられていた。しかし、彼らにとつて、神への讃美は歌と太鼓、そして拍手なのである。国レベルでの独立は一九六〇年代に達成されたが、文化レベルの「独立」はおそらくこの二十年の間に急速に達成された。そして、この文化的「独立」と平行してタンザニアのルーテル教会は爆発的に増大していった。現在ではおそらくは三五〇万人の信徒がいるといわれている。これはタンザニアの全人口の一〇パーセントに相当する。ミッションスクール、ヘルスセンターの働きも大きく、タンザニアの人々を教会に引きつけたことは確かである。しかし、やはりアフリカの伝統文化とキリスト教が礼拝様式において繋がった時に、大きな変化は生じたのではないだろうか。共同体の中心としての教会の中は、たとえ雨漏りがするような粗末な建物であつたとしても喜びがある。植民地時代に「押し付けられた」キリスト教ではなく、自分達アフリカの伝統の中におけるキリストがそこにいる。天地創造からムング（スワヒリ語の神）は、遠くへ行つて、自分達の事は忘れ去られてしまつたが、イエス・キリストの受肉、そしてムングはアフリカの人々のために十字架を背負つてくださった。もはや、祖先崇拜に頼る必要はない。アフリカ伝統宗教の背後にある見えない霊に対す

る恐怖心は、キリストの十字架のもとには存在しない。あるのは、感謝と喜びである。ここにマルチン・ルターの聖書のみ、信仰のみ、恵みのみという精神が、世界の最貧国であるタンザニアで結実し、具現化している。最も「豊かな」国の一つである日本からの若者二人が、最も「貧しい」国の一つであるタンザニアで洗礼を受けたのは非常に象徴的な出来事であった。そして、この二人は日本では教会に行く事を忌避している。

註

- (1) 富田浩造「タンザニアの社会的背景——なぜ、タンザニアが大切なのか」清水晃「タンザニアと日本の明日——キリマンジャロにこだまするODA現場の声」アップル・プレス、二二〇頁。
- (2) Frieder Ludwig, *Church & State in Tanzania: Aspects of a Changing Relationship, 1961-1994* (Bril: Leiden, 1999).
- (3) 今西錦司氏の京都大学人類学術調査隊フィールドワークのメンバーに加わり、以後アフリカの都市社会を研究している日野舜也氏（研究者、前京都文京大学教授）からのヒアリング（二〇〇六年八月八日）によると、他のアフリカ地域で研究フィールドを失った研究者達が「研究難民」としてタンザニアに集まっているという。
- (4) 富川盛道「ダトーガ民族誌——東アフリカ牧畜社会の地域人類学的研究」弘文堂、一一頁。
- (5) 「暗黒大陸」とは、キリスト教が伝わっていないという意味で使用され始めた。
- (6) Gabriel K. Nzalayaimisi, *The Berbers and violence in eastern and southern Tanzania, 1887-1919*, Franz Steiner Verlag Stuttgart, 2000, p.469.
- (7) マジマジ紛争。ドイツと最初に戦ったヘー族の子孫であるファデイリ・サガ氏からの聞き取り調査。詳細は拙小論「タンザニア序説」【ルーテル学院大学・日本ルーテル神学校紀要】（二〇〇四）第三八号、一八一頁参照。
- (8) Drummond, H., *Tropical Africa*, London 1888, p.105.

(9) プハヤ、イラク(ムブル)、ウザラモ・ウルグル、ウベナ、ウサンバラ、中央タンガニーカ、北部タンガニーカの七つ。ノルウェー系のイラク(ムブル)以外はすべてドイツ系。

(10) 牧師以外に、三八〇〇人の訓練を受けたエヴァンジェリストが存在し、特に農村伝道に力を入れた事は特筆に値する。

(11) タンザニアのみならず、アフリカにおける宗教統計は一般的に言つて必ずしも信頼できるものではない。タンザニアにおいては、特にイスラム教とキリスト教の勢力が拮抗しており、それぞれが出している数字に相違が見られる。また、政府もこの種の統計が、少なからず「政治力」を持つてくる可能性があることから一九六〇年代後半から公式統計は提示していない。

(12) いわゆる悪魔祓い。悪霊を追い出し、また「魔女」というアフリカ伝統社会においては特殊な地位を占めていた存在から「解放」していった。「魔女」「呪術師」に関しては、伝統的宗教との関わりで今後研究を深める必要がある。

(13) 当時の宣教師はほとんどマラリヤ、黄熱病等の風土病により早死にをしている。日本伝道の後、アフリカのリベリアに渡ったルーテル教会のブラウン博士もその一人である。

(14) 初等教育に力を入れていたタンザニア政府の協力もあり、勉強を続けたい女学生に対しては、父親を説得できない場合は、保護のため警察権力も発動した。タンザニアの一九六四年の独立以降も、教育においてはキリスト教会と政府は協力関係にあった。初等教育においては、今日では私立学校も認められているが、当時はウジャマ政策のもとすべて政府の直轄となつていった。一方で、中等教育以上においては、教会施設等は教会の直轄の施設として認められた。

(15) 看護婦であるユニス・シムンソンと共にタンザニアの北西部の山岳地帯にルーテル教会の地盤を形成していった。現在もマサイ族から土地を寄付され、マサイと共に活動が続けている。

(16) 人食いライオンは勇猛なマサイにとつても脅威であるが、シムンソン氏は身を挺して立ち向かった。この「事件」

は一日六〇キロを歩くと言われるマサイの間にあつたという間に広まった。詳細は Jim Kibuchai, *The Cross Under the Acacia Tree: The story of David & Eunice Simonson's Epic Mission in Africa*, Minneapolis: Kirk House, 1998 参照。

(17) サバンナにあって降雨は一つの霊的現象が起きる前兆ともいわれるが、まさにそのような小雨の中、「私の羊をやしなえ」という声が天から突如降って来た。そして「私の民、マサイよ、今や時は来たれり。我が王国に入るべし」との声を聞いたという。この出来事を通して、ントコテ氏はキリスト教を受容し、それに引き継いで三〇〇人以上のマサイが洗礼を受けたという。

(18) ニ〇あるルーテル教会のダイオシス(教区)が、すべて一つの価値観で動いているかという事については必ずしもそうではないようである。マサイ族が多い北西部の地域では、所与のものとして一夫多妻制は認めざるを得ない。一時、アルーシャが、他のダイオシスから分離独立をしようと試みたという報告があるが、おそらくはこの大問題である一夫多妻制の事が問題になったのではないかと推測される。

(19) *Tanzanian Daily News*, July 2, 1972.

(20) *Tanzanian Daily News*, September 18, 1972.

(21) タンザニアの社会主義政策の事をさすが、スワヒリ語では家族という意味であり、中国、ロシアとはまた異なる視点で考察されるべきであると筆者は考えている。日本を初め欧米の経済学者は、失敗に終わったと結論づけることが多いが、タンザニアの政府関係者にウジャマについて話を聞くと、一様に顔が明るくなる。確かに、経済的指標の上で例えば、国民所得も世界銀行の統計によると二〇〇三年には二〇六位と下位から三番目である(最下位はシエラレオネ、その次がマラウイ)。しかし、二〇〇三年に現地調査をした際の印象は都市部には貧富の差が顕著に見られるものの、奥地へ行けば行く程、人々の顔が豊かに、また土地を有しているためか、米、トウモロコシの耕作と牛、豚、鶏を庭に飼っているため食糧が不足しているようには見えなかったし、逆に豊かに感じる事の方が多いというのが率直な印象である。数字の世界とは異なる豊かさを感じる。

- (22) ザ・タンザニア・ナショナル・ユニオン前は Tanganyika African National Union, 統合後は Tanzania African National Union.
- (23) *The Christian Century*, March 1, 1972.
- (24) Quoted in: T. Dronen, *Present Trends in the Christian-Muslim Relationship on the Coast of East Africa*, M.A. thesis, Oslo, 1995.
- (25) Quelle:ELCT/ND, Moshi, 77/1.
- (26) Tabora Archives 730.001: Daily News, Friday (May 2nd, 1986): “Church and State Partners in development. Opening address by President Ali Hassan Mwinyi at the conference of East and Central African Roman Catholic Bishops”, Moshi, Tanzania, 21st April 1986.
- (27) J.K.Nyerere, “The problem of education in Tanganyika”, *Dar es Salaam*, 20.12. 1963.
- (28) エイトリアン・ヘイスティングス『アフリカのキリスト教——ひとつの解釈の試み』斎藤忠利訳、教文館、七七頁。
- (29) 笠井恵二『シエヴァンソン——その生涯と思想』新教出版社、三九六—四〇二頁参照。
- (30) 富田前掲書、一二二頁。
- (31) Bishop Swallo, *Uongozi wa Kanisa la Kilutheri 1960-2000 in Uongozi wa Kanisa*, Mzumbe, 2001.
- (32) Bahendawa, IUCO, 2002.
- (33) ELCTは現在一五二のヘルセンターをタンザニア全土に展開し、アラリヤ、エイズ対策、教育、カウンセリングの拠点となっている。ほとんどの施設は、モロコロ教区のムクラジ、キガニラのように辺鄙な地域にある。
- (34) John S. Mbiti, “Christianity and Traditional Religions in Africa”, *International Review of Mission*, Vol. LIX No. 236 Oct. 1970, P432.
- (35) ヘイスティングス（斎藤忠利訳）前掲書、一九頁。
- (36) 前掲書、五五頁。

(37) 社会構造の中で、酋長を中心とする社会において、むしろこのビショップを中心とする体制は自然の成り行きとも考えられる。ここでの欧米諸国からみた課題は、神学的というよりはむしろ、いわゆる「賄賂」の問題である。例えば E L C A (Evangelical Lutheran Church of America) 本部から、E L C T (Evangelical Lutheran Church of Tanzania) に経済的支援をした場合、本来の目的である教育、医療活動に対してではなく、「管理費」として相当量が上層部の手元に入ってしまうケースがあり、現在では、直接、教会と教会、あるいは個人と個人の関係で支援をする事が増えている。

(38) 前掲書、九一頁。

(39) オレ・ントコテ氏が羊とヤギを放牧していた時、雨が降って来た。雨は神顯現の予兆であり、またマサイにとって神は雨でもある。白く輝く石を見るとその石は、人の耳の形であったという。そして、天から「私の羊を養え」という声を聞く。

(40) Jim Klobuchar, *The Cross under the Acacia Tree: The story of David & Eunice Simonson's Epic Mission in Africa*, Kirk/Minneapolis, 1998.

* 本論文は日本基督教会第五回学術大会（二〇〇六年九月二二日、上智大学）における研究発表「タンザニアの教会形成と文化変容」を加筆修正したものである。また、本論の執筆に際しては、ルーテル学院大学の特別研究費（二〇〇四―二〇〇五年）によりタンザニアのフィールドワーク、文献収集の助成を受けた。